

5月20日、大阪市で大型蓄電池の安全性を調べ、認証機関の役目を果たす「蓄電池評価センター（NLAB）」がオープンした。独立行政法人の製品評価技術基盤機構（NITE）が85億円をかけて整備した。

再生可能エネルギーや電気自動車の普及で重要性が増す蓄電池の世界市場を、経済産業省は2020年からの10年間で70兆円規模とみる。NLABの稼働によって日本の電池メーカーは米国やドイツなど海外認証機関を使うのに比べ時間と輸送費を節約でき、国際競争力が増す。

大型実験棟は大量の蓄電池を収めた長さ約16メートルのコンテナ1つ、約12層のコンテナ2つを格納し測定できる。内部に多くのエネルギー

編集委員
竹田忍

蓄電池、基幹輸出品への道

―をためた蓄電池が燃えて負うバッテリーに使用は銃破裂する場合に備え、壁の撃に耐える可能性があり、厚さは1.2倍。TNT火薬も関心を示す。

薬19.8キロ相当の爆発に耐える。別の実験室にはリチウムイオン電池（LiB）にクギを刺し、治具で押しつぶすなどして絶縁破壊し

業化した。「クギ刺しに耐え、1万回充放電しても初期の80%以上の容量を維持する。充電回数が多い電気バスに向く」と東芝インフラシステムソリューション社の江草俊副社長は語る。ジーエス・ユアサコーポレーションはリン酸鉄系以外にコバルト系など様々な電池を選択した。5月には米大手電力会社から実機を受注した。

はリン酸鉄系に着目、「補助金対象の電気バスをリン酸鉄系の搭載車に絞った」用した。LiB事業はグループの全売上高の10%にあたる400億円を稼ぐ。パナソニックは鉛蓄電池事業をジーエスに売却、車載用のLiBとニッケル水素電池に経営資源を集中。米市場は門戸を開く。

経営の視点

安全性追求が突破口に

てわざと熱暴走を再現する。特許切れを視野に中国文に広がる。海上自衛隊の装置もある。

最近、注目されているのが、蓄電性能は劣るが安全性の高いリン酸鉄系LiB（パナソニック）。大気汚染が深刻な中国で排ガスをたす400億円を稼ぐ。パナソニックは鉛蓄電池事業をジーエスに売却、車載用のLiBとニッケル水素電池に経営資源を集中。米市場は門戸を開く。

米テスラなど国内外44車種で納入実績があり、さらに30車種の追加を目指す。住友電気工業はLiBとは別方式で硫酸バナジウムの電解液など燃えない材料だけで構成したレドックスフロー電池を選択した。5月には米大手電力会社から実機を受注した。NLABの原点は1928年に発足した「輸出絹織物検査所」。主力輸出品の絹織物について品質を確保するのが狙いだった。この歴史的経緯を踏まえ、NLABで検査したLiBやレドックスフローはかつての絹織物同様に基幹輸出品となるべき使命を負う。低コストと大容量だけでは不十分。外国製品を圧倒する安全性を備えて初めて世界市場は門戸を開く。